様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６９０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１８００

研究課題名（和文）「阿片」から測る生活水準、財政行動への影響：英領期マラヤ、ボルネオ、ビルマを例に

研究課題名（英文）Quantifying the impact of Opium to Living Standard and Government Fiscal Behavior in British Malaya, British North Borneo and British Burma

研究代表者
杉本　一郎（Sugimoto, Ichiro）

創価大学・国際教養学部・教授

研究者番号：５０５４６３６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本構想の成果としてJournal of Southeast Asian StudiesというCambridge University PressのJournalより"Opium consumption and living standard of Singapore, 1900-1939"と題する論文の出版を達成することができた。この論文によって、これまでAllen等が適応してきたWelfare Ratioの基礎となる生存に必須なアイテムに阿片を含んだ時の解釈を展開することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
実質GDPと生活水準の推計とそれを用いた研究は、英領期マラヤの経済成長の軌跡と他地域との比較研究を可能にした。しかし標準化されたフォーマットを用いた比較だけではなく、歴史的背景に基づいた地域独自の「特殊性」を注視すると、異なる結果や、方法論自体への再検討といった可能性が生まれることがわかる。東南アジア地域の特に英領植民地期において、OECD諸国や他地域と比べ異なる側面の１つとして挙げられるのが「阿片」であった。本研究を通じて阿片の常習者は生存レベルを下回っており、彼らが購入する阿片が重要な政府歳入となるという植民地行財政の本質に接近することができた。

研究成果の概要（英文）：As a result of this initiative, we were able to achieve the publication of a paper titled "Opium consumption and living standard of Singapore, 1900-1939" in the Journal of Southeast Asian Studies, a journal from Cambridge University Press. This paper enables us to develop an interpretation that includes opium as an essential item for survival, which underlies the Welfare Ratio that Allen and others have adapted until now.

研究分野：数量経済史

キーワード：生活水準　阿片　英領期シンガポール　英領期マラヤ　英領期ボルネオ　貧困ライン　GDP

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

研究成果報告

氏名：杉本一郎

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2020 年度～2023 年度
課題番号：20K01800

研究課題名：「阿片」から測る生活水準、財政行動への影響：英領期マラヤ、ボルネオ、ビルマを例に

（英文）Quantifying the impact of Opium to Living Standard and Government Fiscal Behavior in British Malaya, British North Borneo and British Burma

１．研究開始当初の背景

数量経済史研究の長期経済統計推計と実証研究は、国民経済体系（SNA）の概念と手法の構築とともに OECD 諸国を中心に 1970 年代以降大きく発展した。推計対象時期の拡大、推計手法の改訂が進展し、英領期マラヤにおいても同様に長期経済統計の整備と実証分析が発展した。また実質 GDP とは異なる分析手法として、ロバート C.アレンは実質所得/賃金値に着目し、生活必需品値との比率（Welfare Ratio）を用いた生活水準分析の手法を開発し、同様の研究が OECD 諸国をはじめ多くの国・地域、多様な研究対象時期で行われ、諸国間、地域間の多角的な比較経済史研究が発展した。申請者は英領期シンガポールを中心とした長期経済統計推計および経済成長に関する実証分析を行ってきた。上記した(1) 一人当たりの実質 GDP と(2) 実質所得・生活水準の推計結果をみると、一人当たりの実質 GDP は世界経済の状況により値が大きく変動したが、そのレベルは 1930 年代には日本と同等レベルにあったことが確認できた。また Welfare Ratio の試算についてみると、他の主要なアジア都市の生活水準と比較すると相対的に高いことが示された。こうした比較研究の基礎となるのは定義と推計手法の標準化によるところが大きい。しかし数量経済史研究の重要な側面は当該地域の特性を反映することにある。OECD とは異なる東南アジアの英領植民地の一つの特性として挙げられるのが「阿片」の存在である。本構想ではこの「阿片」が当該地域の経済活動にどのような影響を与えたのかを数量的に測ることに注目した。

2. 研究の目的

本研究の目的は東南ジア地域の旧英国植民地マラヤ（現西マレーシア、現シンガポール)、北ボルネオ（現サラワク州、サバ州)、ビルマにおいて「阿片（Opium/Chandu)」が植民地経済に与えた影響を、長期的経済統計の推計と関連史料の検証を通じて、具体的に２つの視角から分析することにあった。第１に、所得弾力性が極めて低く、広く流通、消費されてきた阿片を生活必需物品リストに含めた場合、消費者層の生活水準はどのように変化をするのかアレン C.ロバートの標準的な分析手法に当該地域の特殊性を加えた長期的趨勢を明らかにすることとした。第 2 に植民地財政の基盤形成段階で主要歳入項目であった阿片と 1920 年代以降の ORRRF 等の財政投融資として機能した阿片の役割の変遷を通じて植民地行財政、更には英国本国、植民地間の資金の流れを分析し、植民地政府の財政行動と経済成長について明らかにすることにあった。本研究の学術的意義には以下４つの点が挙げられる。**第１**に「阿片」に関する経済・社会統計を東南アジア地域の英国植民地を対象に、一次・

二次文献を活用検索し、可能な限り統計データの整備を行うことにある。具体的には研究対象地域ごとの、阿片の市場価格、卸値、阿片専売による植民地行政府の歳入、類型化した阿片消費量、有価証券として流通した ORRRF の投資先とその額等を収集する。**第２**に「阿片」消費が、常習者にとって何故生活必需とされるべきか、嗜好品という枠組みでは捉えられない点を多角的に明らかにしていくことにある。そして当該地域の特殊性を考慮した場合、標準化された Welfare Ratio と如何に結果が異なるかを初めて明らかにする。**第３**に ORRRF に見られるように、阿片歳入を元手とした資金運用は、東南アジア地域のみならず、宗主国英国ならび世界中の英領に投資という名のもとに還流していた。そして日本占領期終了後から、英領マラヤにおいては、その所有権が宗主国である英国本国に帰属した。その背景を Colonial Office Record や、各種統計データを整備することで明らかにすることにある。**第４**に本研究で長期経済統計の推計と比較分析を行う地域は、現在の東南アジア地域の特性の一つである生活水準の諸国間の違いが顕著な地域である。同じ英国を宗主国とした地域ではあるが、独立以前に既に大きな違いが存在したと予想される。本研究を通じて、生活水準の「原型」を数量的に初めて提示し、その要素を探ることは学術的に意義があると言える。

３．研究の方法

本構想では、これまでの研究成果の蓄積を考慮し、英領期シンガポールを軸に（１）阿片の消費支出（２）阿片を含めた生活必需品支出（３）阿片消費者の実質所得（３）阿片専売による政府歳入と財政投融資額等の時系列データ等の分野の推計を行った。

本推計を行うにあたり、阿片の流通・消費また植民地政府による規制等について関連文献を収集する。本構想では英国王立公文書館より CO275、CO874、CO1022 シリーズの一部を WEB 上で抽出し、デジタルベース史料の購入を行い、海峡植民地、マレー連邦州、マレー非連邦州の各種関連統計の収集と、阿片消費、政府歳入、有価証券投資に関する記述を収集して包括的な分析に努めた。

また推計結果と分析については、2022 年に開催された Asian Historical Economics Conference (AHEC)で報告を行い、改訂後 Journal of Southeast Asian Studies に投稿用論文を作成した。第２段階として同様の資料収集と推計作業を西マレーシア（海峡植民地、マレー連合州、非マレー連合州）北ボルネオ（サラワク、英領北ボルネオ）について行った。それを用いて地域間の比較研究を行った。なお英領ビルマはデータの所在が他地域とは異なるため、資料収集は英国国立図書館等で行う予定であったが、時間的な制約、費用等の課題があり、実現を断念せざるを得なかった。英領マラヤ地域については阿片に関する統計資料をデータベース化し、地域間の比較をおこなえるレベルまで作成した。こうした研究方法を用いることで、阿片消費を取り込んだ Welfare Ratio が、通常の状態と比べると大きく変化し、シンガポールの非熟練労働者の生活水準は、他の主要都市比べても低くなることを示すことができた。また ORRRF 等の財政投融資が英国本国並びに他の植民地にも大きく融資されていることが判明した。現在作成中の論文の投稿を行なっていく予定である。

4. 研究成果

例）シンガポールにおける阿片消費と生活水準（1900 年～1939 年）

研究協力者の Choy Keen Meng と Journal of Southeast Asian Studies から出版した「シンガポールにおける阿片消費と生活水準（1900 年～1939 年)」と題する論文では、20 世紀

初頭のシンガポールにおける労働者の生活水準に対する阿片消費の経済的・社会的影響を測ることを目的に設定した。英領期シンガポールの長期経済統計を詳細に分析し、阿片の総消費量を推定し、特に重労働を支えるために阿片に依存していた熟練労働者の生活水準の再検証を行なった。

阿片は 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、ヨーロッパの貿易と植民地支配によって東南アジアにもたらされた。この時期に、シンガポールは阿片の流通と消費の中心地として台頭した。特に華人労働者が多く、阿片は彼らの日常生活に深く根付いてきた。

図１：アジア主要国の一人当たり実質 GDP、1900-1939（1990 値）

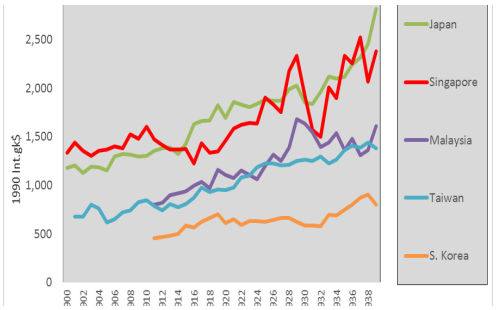
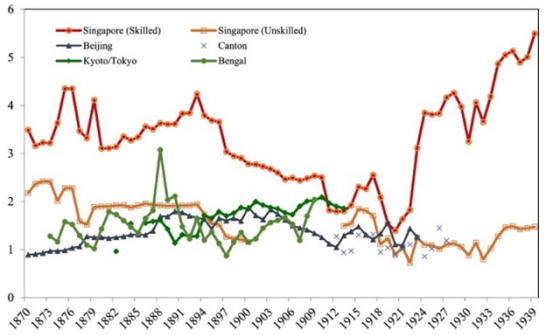


図２：アジア主要都市における生存水準倍率 1870-1939



阿片の広範な使用を維持する上で、阿片窟の設立と Revenue Farm による実施が重要であった。英国植民地政府が華人有力者に阿片の加工・販売を独占的に許可するもので、この独占権から植民地政府は多大な政府歳入を得てきた。そして政府は阿片販売から得られる収入に依存するようになった。阿片窟の普及により、多くの労働者が阿片を容易に入手できるようになり、阿片消費が、労働者を中心に浸透した。

チョイと杉本は、海峡植民地政府のアーカイブ資料や統計記録を用いて、阿片の消費量と価格に関するデータの再構築を試みた。このプロセスでは、断片的で不完全な記録を丹念に収集し、1900 年から 1939 年までの年間阿片消費量を推定した。この際、密輸やその他の未記録の消費があることについても言及した。これらの課題に対処するため、政府報告書、収税記録、当時の報告書を精査し、情報源を、クロスリファレンスを行い、阿片消費のパターンをより包括的に把握することにつとめた。また、労働者の消費バスケットに阿片を統合することで、経済的現実をより正確に反映した。

阿片消費の分析では、消費量が長期的に減少傾向にある一方で、価格の上昇により支出が増加し続けていることが明らかになった。シンガポールにおける阿片消費のピークは 1920 年頃で、その後大幅に減少した。この減少は、政府の規制措置や経済不況、阿片使用に対する社会的態度の変化など、複数の要因によるものであった。

この研究の重要な発見は、阿片の需要が非弾力的であることである。価格が大幅に上昇しても、消費量自体は基本的に大幅な減少は経験しなかった。この非弾力性は、阿片が持つ中毒性と、多くの労働者にとっての必需品としての性質によるものであると言える。阿片消費の経済的影響は特に労働者の生活水準に深く関わってきた。本研究では、重労働に従事する労働者にとって、阿片は食糧や住居と同じく基本的な必需品と見なすべきだと主張し、阿片を生活必需品のバスケットに含めることで、労働者の生活状況に対する再評価を行なった。阿片の高コストは賃金に比して非常に高く、多くの労働者が絶対的貧困レベル以下の生活水準にあることが分かった。特に経済不況の時期には、その影響は一層顕著であった。阿片に対する支出が他の必要品に使える可処分所得を大幅に減少させ、労働者とその家族の困

窮を悪化させたことが分かった。（図３を参照）

政府は阿片の規制を目指し、最高価格の設定、喫煙者のライセンス制度、供給の配給などの措置を講じた。これらの措置は阿片消費の管理と削減を目指したが、中毒の根本原因や広範な阿片使用の社会的影響への対処には不十分であった。

公衆衛生の取り組みや社会運動は、阿片使用に関する議論の形成に重要な役割を果たした。活動家や保健当局者は、阿片が個人やコミュニティに与える悪影響を強調し、より厳しい規制と中毒者への支援体制の改善を求めた。最終的に、Revenue Farm の廃止とより厳しい規制の実施により、消費量は大幅に減少したが、1943 年の日本占領まで完全には消滅しなかった。

本研究では、阿片消費がシンガポールの労働者の生活水準に与えた深刻な影響をもたらしたことを長期経済統計推計として測ることで明らかにした。阿片を生活必需品のバスケットに統合することで、労働者の生活水準の実情に、より正確な視点が提供した。図４で示すように、英領期シンガポールにおけるアヘン常習者の絶対的貧困者レベルは他の地域と比べるとはるかに高い位置にあり、より深刻な貧困が存在していたことが判明した。

図３：英領シンガポールにおける生存水準倍率の推計結果

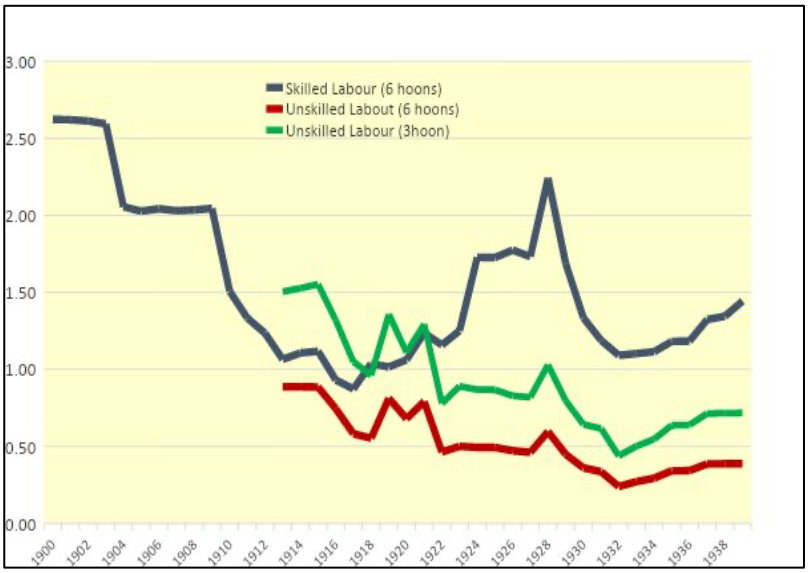
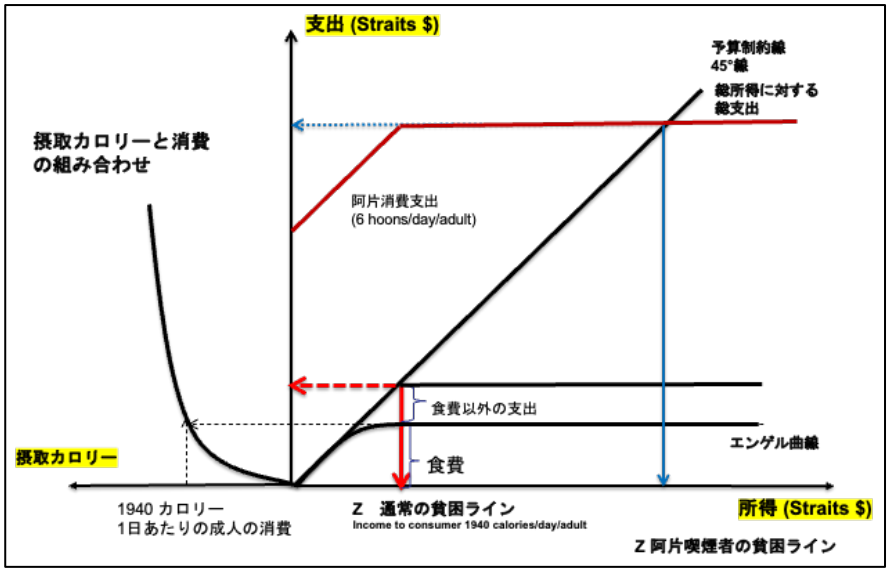


図４：一般的な貧困ラインと華人の阿片喫煙者の貧困ライン



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Choy Keen Meng, Sugimoto Ichiro	４．巻 I
２．論文標題 Opium consumption and living standards in Singapore, 1900 to 1939	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Journal of Southeast Asian Studies	６．最初と最後の頁 116-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S0022463423000139	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Ichiro Sugimoto	４．巻 50555
２．論文標題 Ichiro Sugimoto: Rezension zu: Kim, Diana S.: Empire of Vice. The Rise of Opium Prohibition Across Southeast Asia. Princeton 2020	５．発行年 2022年
３．雑誌名 A Journal for Historians and Area Specialists	６．最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 杉本一郎
２．発表標題 英領期シンガポールの生活水準に関する考察： 生存水準倍率推計に阿片消費を含めた場合
３．学会等名 京都大学東南アジア地域研究研究所　GCRプログラム　「海峡植民地年次報告書資料のデータベース化とオンライン公開のこころみ」研究会（招待講演）
４．発表年 2023年～2024年

１．発表者名 Ichiro Sugimoto
２．発表標題 Opium Consumption and Living Standards in the Colony of Singapore, 1900-1939: An alternative approach for investigating the socioeconomic history of Southeast Asia
３．学会等名 Asian Historical Economic Conference (AHEC) 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名
Ichiro Sugimoto

２．発表標題
Opium Consumption and Living Standards in Singapore

３．学会等名
Seminar Series with Alumni 2022, Department of Southeast Asian Studies, Faculty of Arts and Social Sciences, University of Malaya（招待講演）

４．発表年
2022年

１．発表者名
Ichiro Sugimoto

２．発表標題
Living Standards of Chinese Opium Smokers in Colonial Singapore

３．学会等名
World Bank East Asia & Pcific Chief Economist Research Center（招待講演）

４．発表年
2021年

１．発表者名
Ichiro Sugimoto

２．発表標題
Opium Consumption and Living Standards in Singapore, 1900-39

３．学会等名
ENIUGH: Sixth European Congress on World and Global History（国際学会）

４．発表年
2021年

１．発表者名
Ichiro Sugimoto

２．発表標題
Living Standards of Chinese Opium Smokers in Colonial Singapore

３．学会等名
World Bank East Asia & Pcific Chief Economist Research Center 主催の Kuala Lumpur World Bank Research Seminar（招待講演）

４．発表年
2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	チョイ　キンミン (Choy Keen Meng)	シンガポール経済大学・経済学部・客員教授	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関